

スポーツ分野におけるろう者学教育コンテンツの開発 ー競技スポーツ経験における自己変容に着目してー

筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター
門脇 翠, 小林 洋子, 大杉 豊

～ 現在紹介されている教育コンテンツ カリキュラム例 ～

歴史
①

「ろう者のスポーツ大会への完全参加を目指して」
松島謙司氏の「聾学校が大会への参加を阻まれた事例」動画から学ぶ



日本学生野球連盟と違うのがあることに「高等学校野球連盟に加盟できる学校は

目的

1) 現在に至るまで、ろう学校の生徒がスポーツ大会に参加する際にどのような理由で阻まれてきたのか、いくつか事例を知る
2) 参加を阻まれた当時の障害者観や社会的背景について知る
3) ろう者が聴者同様スポーツ大会に参加するためには、何が必要かを考える
4) ろう者がスポーツ大会に参加することについて議論を行い、自分の意見を述べ、議論できる力を養う

歴史
②

「デフリンピックを通して考えよう」
デフリンピックについて、ハンマー投 森本真敏選手 または マラソン 泉裕子選手の動画から学ぶ

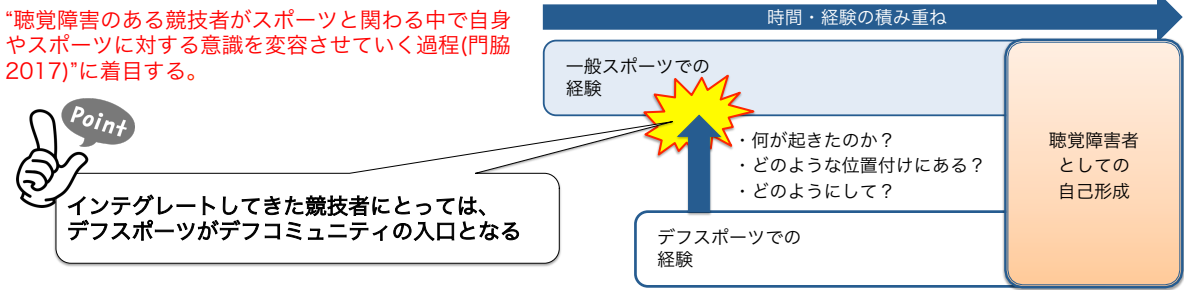


高校の時からハンマー投げを始めてから記録も伸びて

目的

1) ロールモデルとしてのろう者と出会う（直接・間接）ことで、肯定的な自己像を形成する
2) デフリンピックについて知ること、スポーツへの取り組みに対する向上心を育成する
3) デフリンピックの現状を理解し、課題や今後の展望・対策を考える（聾学校高等部向け）

～ 今回の新しいカリキュラム ～



<今回の協力者> 山崎 望さん（バレーボール）



PROFILE
経歴

1985年高知県生まれ。父、母、兄2人のきこえる5人家族。幼稚園は高知聾学校、小学校からは一般学校に通う。中学校から本格的にバレーボールを始め、高知商業高校時代では四国大会で26年ぶりとなる優勝に貢献し、春高バレー（全日本バレーボール高等学校選手権大会）に出場。当時はエースアタッカーと呼ばれる。また高知県では初選出となる西日本代表として栗原恵らと東西大会に出場。スポーツ推薦で大阪女子短期大学に進学後も1部昇格に貢献。卒業後は実業団のオファーを受け、プロ選手として活躍。夏季デフリンピック競技大会へは、メルボルン(2005年)、台北(2009年)、ソフィア(2013年)、サムスン(2017年)と4度の出場経験がある。

2つの世界を経験した “きこえない競技者から学ぶ「自己価値の変換」”

指 導 案

- 1 対象
高等部（聴覚障害学生）
- 2 指導の形態
通常教室
- 3 指導の目的
一般スポーツと聴覚障害者がするスポーツ（ろう学校の部活も含む）の両方を経験した聴覚障害のあるアスリートの事例を紹介する。
聴覚障害のある人が一般スポーツに参加できる方法について考えさせる。
- 4 指導にあたって
・一般学校で教育を受けてきた（インテグレート）、聴覚障害のある山崎望さんが競技（一般）スポーツを始めたところからデフスポーツに関わるようになる経緯をまとめた動画を用いる。
- 5 本時の展開

過程	学習活動	指導・支援内容 (留意事項及び配慮事項)	評価の観点
導入 10分	まず、デフリンピックについて紹介する。	1. 動画視聴（デフリンピック） また、スライドでデフスポーツの種目などを紹介する。	動画やスライドに興味を持ち、集中して見ているか【観察・関心】
展開 25分	動画を見て「デフアスリート」について知る 動画を見ながらワークシートに記入する ※動画の中のタイトルごと一時停止	2. 動画視聴（山崎望さんインタビュー） ①スポーツに関わるまで[2分20秒] ・バレーボールを始めたきっかけ（40秒） ・聴者とのコミュニケーション方法（1分40秒） ②デフスポーツとの出会い[6分10秒] ・デフバレーボールとの出会いと印象（1分） ・手話に対する抵抗と葛藤（2分） ・逆導入について（1分30秒） ・山崎さんにとってのデフバレーボールとは？（30秒） ・今後の活動について（1分10秒）	動画やスライドの内容をしっかりと理解できているか【考察】
まとめ 10分	ワークシート①② 2つのスポーツの経験を通して山崎さんはどのように変化していったかを理解できているか穴埋め形式のシートでチェックする ワークシート③ 自分なら一般スポーツとどのように関わるか、考えを書く。 書いたことを発表し、みんなで話し合う。	※動画にある、山崎さんの行動と心理面の変化に着目する。	自分の考えをまとめてきちんと発表できたか、他者の意見をきちんと聞くとしているか【発表・議論】

- 6 参考・引用文献またはWebサイト
・全日本ろうあ連盟, <https://www.jfd.or.jp/sc/deaflympics/games-about>
全日本ろうあ連盟スポーツ委員会デフリンピック啓発ウェブサイト「デフリンピックの概要」
・全日本ろうあ連盟スポーツ委員会デフリンピック啓発ウェブサイト「速報動画(Youtube)」
<https://www.jfd.or.jp/sc/samsun2017/newsflash>



山崎さんがスポーツに関わるまで

キーワード① 周囲の障害観

- ・小学校6年生の時に、クラスの友達に誘われたが、きこえないことを理由に母が2度断っていた。
- ・監督が障害のあるないは関係ないからという話をしてくださって、母は嬉しくなり、そのバレーチームに入れさせてもらった。

キーワード② 周囲との関わり方

- ・自分の持っている力を出し切れば良いと思っていた。
- ・監督の話をキャプテンがまとめて短くして教えてくれた。同級生は肩を叩いて声をかけてくれる。



山崎さんのデフスポーツとの出会い

キーワード③ デフコミュニティの入口

衝撃と葛藤

- ・代表監督に誘われて、海外にチャレンジしてみたいという気持ちからメルボルン大会に向けた代表合宿に初参加する。
- ・デフリンピックの手話だけというのに衝撃だった。
- ・（手話を）理解しようと思わなかった。

障害の否認

- ・同じ障害ではないと自分の中では思っていた。
- ・普通に健聴者として、障害は持っているけど、壁を自分から作っていた。
- ・コミュニケーションも全く取らなかった。

キーワード④ 価値観の変換

障害受容

- ・試合を見に来てくれた仲間への感謝の気持ちから手話を覚えた。
- ・狩野さんのためにもチームを強くしたい、自分の技術をみんなに教えたいという気持ちからコミュニケーションを積極的に取るようになった。
- ・バレーボールがあったからデフリンピックにも出会えたので、これは生き甲斐なのかなと思う。
- ・中学校の時に世話になった監督に連絡をして、こういう耳が聴こえない選手がいるというアピールをしてほしいとお願いをした。

逆導入

- ・「声だけに頼らないで、顔も見ることがあるね」という周りの気づきからの一般スポーツでのアイコンタクト、きこえないこととは関係なく意気高揚のためにやるデフスポーツでの声出し。

デフリンピック 価値の認識

- ・県外の特にデフリンピックの知名度が低いところに自分から行きたいと思う。
- ・耳が聴こえなくて聴者と一緒に生活をしていたという人があるかもしれないので、その人もスポーツをやっていたら、少しでもデフリンピックと関わってもらいたい。

(きこえない人同士の)デフスポーツと(きこえる人に交じる)一般スポーツという2つの世界の存在と意義を学び、それぞれにうまく対処して人間関係を築くための「価値観の変換」のあり方について考える